

Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2021

Report

2021

文明研究所長としての6年間をふりかえって

山本 和重

文明研究所長
文学部歴史学科日本史専攻教授

前所長沓澤宣賢教授の後任として、2016年4月から3期6年間、所長を担当させていただいた。任を終えるにあたり、感ずるところを記したい。

文明研究所長への就任は、私にとっては青天の霹靂というべきものであった。2001年に旧文明研究所、社会科学研究所、芸術研究所が統合して新文明研究所が発足する以前の、旧文明研究所の時期に研究プロジェクトの一員としての経験はあったものの、新文明研究所の事業には全く関係していなかったからである。しかしながら、2015年6月に文科省から、国立大学の人文系・社会系学部について「社会的要請の高い分野への転換」を求める通知が出されるなど、人文学に対する社会的評価の著しい低下という状況があった。そうした時勢であったので、本学における人文学の研究を、学部をこえて活性化させることには少なからず関心があり、引き受けた次第である。ちょうど、本学では、2016年4月に総合社会科学研究所が発足し、新年度における学長の方針説明での、文明研究所は人文学を中心に活動してほしいとお話しも、人文学の活性化という構想を推進する支えとなった。

人文学についての研究プロジェクトとしては、研究所ですでに「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」（代表者：平野葉一教授）があり、「文明間対話」というテーマで国際シンポジウムを開催するなど、旺盛な研究活動が展開されていたが、2016年から新たに「20世紀人文学の方法論的再検討」のプロジェクトを設け、学外の研究者も招いて研究会を継続的に行った。また2019年度からは2つのプロジェクトを統合して、コア・プロジェクト「人文学の方法論に関する総合的研究」として研究活動を推進してきた。それらの研究成果は、本研究所発行の学術雑誌『文明』の各号に掲載されているところである。

任中に、研究所のもう一つの柱としたのが、本学が所蔵する文化財の保存・整理、研究、活用であった。本研究所は、本学が2004年に購入した、「アンデス先史文明に関する遺物」（アンデス・コレクション）を保管していた。同コレクションは、土器、織物、金属器、木製品など総点数1918点（2022年1月現在）、紀元前1000年ごろのアンデスの文明確立期から16世紀植民地時代初期までのほ

とんどの時代と地域を網羅するもので、国内有数のアンデス先史文明コレクションである。実は、所長を引き継いだ時点では、その存在すらほとんど承知していなかった。ところが2016年10月に平塚市民・大学交流事業として開催した講座でコレクションを展示したところ、遺物に劣化が生じていることが判明した。コレクションは人類の遺産である。それを保管する者には、後世に確実に継承する責任があるから、その衝撃は大きかった。劣化に対する責任とともに、遺物の継承の観点から誠実な対応が必要であった。予算的に厳しい面はあったが、大学運営本部の支援も得て、遺物全品についてのガス燻蒸、燻蒸後における保存修復専門家によるクリーニングを実施するとともに、保存箱の取り換え、収蔵庫の環境改善など、1期目は遺物の修復と保全に注力することとなった。

2期目以降は、コレクションの研究、活用が課題となった。2018年には総合研究機構の特別補助金を得て、17号館ネクサスホールを借り切って遺物の写真撮影を行うとともに、マイクロ・ナノ研究開発センターの協力を得て土器のX線CT解析を行うなど、HPでの遺物公開に向けた準備を進めた。また2019年8月にはマイクロ・ナノ研究開発センターと共催で、「文化財を科学する—アンデス土器の構造解析に関する共同研究会—」を開催できた。学内外の研究者が参加した、この共同研究は、2020年度には研究懇親会として継承され、そうした研究活動を基礎として、2021年には平塚盲学校と連携して、コレクションの「笛吹きボトル」を活用した造形授業（3回）が実施された。恐慌状態に陥っていた2016年10～11月の時点をふりかえれば、現時点でのコレクションについての研究や活用の状況は、目を見張るばかりである。この間、この研究プロジェクトを中心に担われた山花京子所員、吉田晃章研究員らのご尽力と、マイクロ・ナノ研究開発センターのご協力に感謝するばかりである。

昨年12月、定例の所員会議で、今後の研究所の方向性について議論を行った。「文明」を冠する研究所としては、哲学や思想に基盤を置き、長いスパンで人間の営為を検討することを基本的なスタンスとするべき、というのが全体の意見だったように思う。今後もそうした姿勢が継承されることを期待したい。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は1959年に遡りますが、2001年の新文明研究所の設立後は、「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2013年度まで、おおよそ3年を1期とする研究プロジェクトを策定し、研究を推進してきました。第1期(2001年度～2004年度)は「現代文明の展開と社会文化的多様性」、第2期(2005年度～2007年度)は「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」、第3期(2008年度～2010年度)は「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」、第4期(2011年度～2013年度)は「創造すべき21世紀文明」でした。2014年度からは、本学の第II期中期目標(2014年度～2018年度)を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げて、共同研究を進めました。

2016年4月の総合社会科学研究所の設置にともなって、本研究所の研究活動は人文学を中心に進めていくことになり、人文学の活性化と、本学が所蔵する文明遺産の整備・研究・活用とを、2つの柱として、共同研究をすすめています。前者では、この間、「超領域人文学(Trans-Disciplinary Humanities)構築に向けた基礎研究」と「20世紀人文学の方法論的再検討」の2つのプロジェクトを実施してきましたが、2019年度からは両者を統合して、コア・プロジェクト「人文学の方法論に関する総合的研究」として研究活動を推進しています。後者では、コア・プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」・「同II」において、本学が所蔵する「アンデス先史文明に関する遺物」(アンデス・コレクション)と「古代エジプト及び中近東コレクション」(AENET)の保管・整理を行うとともに、本学のマイクロ・ナノ研究開発センター等との連携による文理融合型の研究や、展示会の開催などを行っています。また、学部を超えた文系の共同研究である「戦後大衆文化に関する基礎的研究—緒形拳関係資料の整理をめぐって—」(2017～20年度)、「人間営為と環境の関係性—人文学・社会学の視点から」(2019～21年度)、「美人画に関する基礎的研究」(2020・21年度)、「近現代芸能史に関する研究」(2021年度)についても、本研究所の課題として展開しています。

本研究所は、国際的な学術交流と若手研究者の育成を重視し、2015年度からコペンハーゲンにある東海大学ヨーロッパ学術センターで、国際シンポジウム「文明間対話」を開催してきました。2020年3月に高輪校舎で開催する予定であった第5回国際シンポジウムはコロナ禍のため開催を断念せざるを得ませんでした。国内外の研究者に呼びかけ、2021年3月刊行の『文明』第27号を欧文編 Special Issue of Covid-19として、また2022年3月刊行の同第29号を欧文編 Special Issue of Resilienceとして刊行しています。

前述のように、本研究所では2つの文化財のコレクションを保管しており、それぞれHPで公開しておりましたが、2021年度には、HPのリニューアルや公開点数の拡大をはかるとともに、両HPを文明研究所のHP内に開設いたしました。また特記すべき活動として、平塚盲学校と連携し、アンデス・コレクションの「笛吹きボトル」を活用した造形授業(3回)の実施があります。文化財についての共同研究を基礎としつつ、その社会的活用といった側面でも実績をあげています。

2021 年度の研究プロジェクト

「人文学の方法論に関する総合的研究」

(コア・プロジェクト 1)

本研究所の柱の一つである人文学の活性化について、2018年度まで実施してきた「超領域人文学(Trans Disciplinary Humanities)構築に向けた基礎研究」と「20世紀人文学の方法論的再検討」の2つのコア・プロジェクトを、2019年度からは「人文学の方法論に関する総合的研究」として統合し、従来の研究活動を継続するとともに両者の研究交流をはかってきた。本年度はその最終年度であった。

「超領域人文学(Trans-Disciplinary Humanities)

構築に向けた基礎研究」班

平野葉一・田中彰吾・中嶋卓雄・平木隆之
吉田欣吾・服部泰・鷹取勇希
中村朋子・渡邊青・安達未菜

地球温暖化に代表される環境問題に対し、2021年はICPPの公式の見解表明もあって世界規模的な取り組みが叫ばれる1年であった。いまや脱炭素化の動きの加速化、SDGsの推進など人間の文明が「待たなし」のターニング・ポイントにあると痛感せざるを得ない。こうした状況のなか、「超領域人文学構築に向けた基礎研究」班もプロジェクトの最終年を迎えたが、現代文明を支える人間の内面的諸要素(哲学的思考、価値意識、倫理観、志向や感情など)を学際的、多角的に捉えるという視点で21世紀を見据えた知の体系の在り方について検討してきた。とくに昨今のICT時代にあっては、人文学が社会科学的手法および情報の分析を総合させることで人間営為を見定め、将来的な展望を見出すことの重要性が明らかになった。それは現在も続いているCOVID-19のパンデミックに対しても同様であり、“new-ordinary”に向けた新たな“resilience”への価値意識も、人間営為の総合的な検討の延長線上に見出されると思われる。なお、本研究プロジェクトは、個別プロジェクト「人間営為と環境の関係性—人文学・社会学の視点から」との共同で進められた部分が多い。また、本学の大学院文学研究科文明研究専攻の教育・研究との連携で進められたことも付記しておく。2021年度における活動状況は以下のとおりである。

(1) 国際シンポジウム

本プロジェクトで企画していた国際シンポジウム「文明間対話」(Dialogue between Civilizations)は、2021年度もCOVID-19の関係で開催には至らなかった。ただし、2020年度に引き続き、『文明』の欧文誌(Civilizations, No.29)を発行した(詳細は(3)を参照)。

(2) 学内における研究会

超領域人文学の構築に向けた研究として、本研究プロジェクトに参加している大学院生および大学院出身者との「研究報告会」を年間10回開催し、また、個別プロジェクト「人間営為と環境」との合同研究会を年間4回開催した。本プロジェクトの研究テーマである「環境QOL」研究に関しては、国際会議ICICICや比較文明学会等での研究報告を行った。また、『文明』への大学院生を含む研究ノートの投稿(受理・掲載)の他、『文明』欧文誌および上のICICIC、比較文明学会への論文投稿も行った。

(3) 欧文誌“Civilizations”(文明)第29号の発行

2021年度は『文明』欧文誌を“Bricolage”および“Resilience”特集号とし、COVID-19からの回復も視野に入れた論文の公募を行った。最終的には8編の論文が掲載された。なお、大学院生、大学院修了生に関しては研究会での研究報告をとおして議論を重ね、最終稿を受理した。

「20世紀人文学の方法論的再検討」班

山本和重・馬場弘臣・村田憲郎
川崎亜紀子・篠原聡・斉藤仁一郎

本研究計画の目的は、人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21世紀に継承すべき方法をさぐることにある。その問題関心の背景には、19世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科学主義的人文学に対して、20世紀には、哲学、歴史学、民俗学、教育学など、さまざまな領域から反省と新たな方法論が提示されてきたが、それらの成果が必ずしも今日の人文学に継承されておらず、そのことが人文学における方向性の喪失状況、ひいては人文学に対する社会的評価の低下につながっているのではないかと、という認識がある。こうした認識の可否を含めて、学問領域を超えた共同討議によって、人文学の可能性を探ろうと、2016年度から2019年度までの計10回の研究会を開催した。

そこでの議論から身体性（感性）という問題が、20世紀人文学の大きな特徴（論点）として浮かび上がり、2020年3月に高輪キャンパスで「人文学における身体性をめぐって」というテーマでのシンポジウムの開催を企画したが、新型コロナウイルスの感染拡大により開催を断念し、2020年度、2021年度はオンラインで研究会を実施している。2021年度の第12回の研究会は、下記のように外部から講師を招聘し、講演会として実施した。

第12回研究会 [オンライン形式]

(2022年1月27日、17:30～20:00)

樋口聡氏 (広島大学名誉教授)

「身体知教育から感性教育へ」

講演のテーマにも示されるように、内容は本研究会の問題関心と重なるところが多く、講演の後、1時間にわたって活発な議論が展開された。

「東海大学所蔵文化財の活用のための
基盤整備 II」
(コア・プロジェクト 2)
山花京子・吉田晃章・篠原聡
田口かおり・竹野内恵太

本プロジェクトでは11号館に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション (AENET) (以下、

エジプト・コレクションとする) と5号館1階に収蔵されているアンデス・コレクションの活用に関する環境整備と保全を目的としている。

以下では、1). アンデス・コレクションと2). エジプト・コレクションについてそれぞれの進捗状況を記し、合同研究会について後述する。

1). アンデス・コレクション

*新たにHPがリニューアルされ掲載資料点数が増えた。

<http://andes.civilization.u-tokai.ac.jp/>

*10月23日(土)にアンデス・コレクション研究懇談会

—アンデス・コレクションの多角的な研究と活用例—
を文明研究所・MNTC共催で開催した。

東海大学新聞記事

→ <https://www.u-tokai.ac.jp/news-campus/47425/>

2). エジプト・コレクション

*エジプトHPリニューアルの作業が完了し、2022年2月1日付で公開が始まった。

<http://aenet.civilization.u-tokai.ac.jp/>

アンデスとエジプトのHPはいずれも文明研究所のHPからリンクが張られている。

*Early Egypt研究会(2)を7月26日に開催した。
発表者3名 オンライン参加者21名

東海大学文明研究所・東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター共催

2021年度 アンデス・コレクション研究懇談会

—アンデス・コレクションの多角的な研究と活用例—

10月23日(土)
10:30～15:30
オンライン開催 参加費無(無料)



参加申し込み用QRコード

プログラム 開場 10:15

- 10:30 開会挨拶
- 10:40 「X線CTでみるワラワラ模様の土器成形」
- 11:10 「3Dスキャンによるアンデスの人々の「顔」のデータ化」(教)
- 11:40 ティスカッション(午前の部)
- 12:00 休憩
- 12:00 「平塚高等学校における音楽きぼろワークショップに関する報告(1)」
- 12:30 「ナスカ文化の骨髄層の分析—年代判定と形態分析から—」(教)
- 13:00 「前夜きぼろの成形と構造研究」
- 13:30 「アンデス・コレクション内のガラスヒース—
一次式、分析と復元実験から製作地を探る—」
- 15:00 ティスカッション(午後の部)
- 15:25 閉会挨拶

参加申し込み方法

申込先 東海大学文明研究所 ☎0463-58-1211 内線 4902 (10月11日以降 内線 4426)

東海大学文明研究所・東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター共催

2021年度 アンデス・コレクション研究懇談会

東海大学特設教室、2021年10月23日(土)10:30～15:30に開催される。この日、東海大学文明研究所・東海大学マイクロ・ナノ研究開発センターで、アンデス・コレクションの活用に関する研究の進捗を報告し、今後の研究の方向性について議論する。また、この日は、東海大学文明研究所の職員が、アンデス・コレクションの活用に関する研究の進捗を報告し、今後の研究の方向性について議論する。また、この日は、東海大学文明研究所の職員が、アンデス・コレクションの活用に関する研究の進捗を報告し、今後の研究の方向性について議論する。

日時: 2021年10月23日(土) 10:30～15:30
場所: Zoomによるオンライン会議と東海大学海蔵舎12号館1階 MNTC コミュニケーションスペース
(新館本館と新館東2階の間にある)

プログラム

- 10:15 開場
- 10:30 開会挨拶 東海大学文明研究所 所長 山花京子 東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター 所長 吉田晃章
- 10:40 「X線CTでみるワラワラ模様の土器成形」
- 11:10 「3Dスキャンによるアンデスの人々の「顔」のデータ化」(教)
- 11:40 ティスカッション(午前の部)
- 12:00 休憩
- 12:00 「平塚高等学校における音楽きぼろワークショップに関する報告(1)」
- 12:30 「ナスカ文化の骨髄層の分析—年代判定と形態分析から—」(教)
- 13:00 「前夜きぼろの成形と構造研究」
- 13:30 「アンデス・コレクション内のガラスヒース—
一次式、分析と復元実験から製作地を探る—」
- 15:00 ティスカッション(午後の部)
- 15:25 閉会挨拶

参加申し込み方法

申込先 東海大学文明研究所・東海大学海蔵舎12号館1階 MNTC コミュニケーションスペース ☎0463-58-1211 内線 4902 (10月11日以降 内線 4426)

- ・「古代エジプトの顔面装飾の意義について—アイラインの持つ意味—」文学研究科文明研究専攻 小能治子
- ・「エジプト初期国家形成と政治的統合の再検討—ネットワーク的領域構造の構造過程を中心に—」日本学術振興会特別研究員・文明研究所研究員 竹野内恵太
- ・「東海大 AENET コレクション収蔵 先王朝・初期王朝遺物紹介」文化社会学部アジア学科・文明研究所員 山花京子



＊クラウドファンディング「古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！」(東海大学 x アカデミスト)のプロジェクトが目標達成率 138%で成立した。

<https://academist-cf.com/projects/221?lang=ja>
CF期間 6月10日～7月29日。現在は研究を行い、2022年度には結果報告を完了させる予定。



「人間営為と環境の関係性

—人文学・社会学の視点から—
(個別プロジェクト①)

中嶋卓雄・平野葉一・平木隆之
高橋将徳・李昭知

本研究プロジェクトは、前年度まで熊本キャンパスで続けられていた「環境 QOL 研究」(総研プロジェクト、責任者：高橋将徳教授)を取り込み、また今年度まで継続の環境省の「森里川海研究」(環境研究総合推進費 SII-5-2、平野葉一が参加)のテー

マも含めて実施された。「環境 QOL 研究」に関しては国際会議 ICICIC (International Conference on Innovative Computing, Information and Control) での「環境と QOL」セッションを開催した(中嶋卓雄教授が責任者)。また、前でも述べたとおり、「超領域人文学」との合同研究会を実施し、研究の推進および大学院生等の活性化をはかった。

2021年度においては国際シンポジウム「文明間対話」のサテライト・シンポジウム「環境と文明」を開催するに至った。環境省の九州地方環境事務所の岡本光之所長に基調講演をお願いし(事情により原稿を代読)、中嶋卓雄教授と田中彰吾教授が関連研究報告を行った(コーディネーター：平野葉一教授)。結果として、昨今の環境問題に関連しては、科学技術の重要性は当然であるが、むしろ環境問題のみならず多様な文明社会の存続が重要であること、さらにそのための「地域の知」(経験的伝統知、暗黙知など)の尊重が不可欠であることが議論された。なお、『文明』欧文誌には、「Bricolage」および「Resilience」に関連する6編(全体で8編のうち)の論文が本プロジェクトからの投稿となっている。

「美人画に関する基礎的研究」

(個別プロジェクト②)

篠原聡・山本和重・角田拓朗・今西彩子

本研究は、「美人画」の確立に大きく寄与した鏗木清方とその弟子たちの画業を浮世絵の受容という視点から考察し、日本近代における「美人画」の諸相を明らかにすることを目的としている。コロナ禍により2021年度も踏査等が困難となり、達成目標に掲げた資料の基礎調査等については目標達成には至らなかったが、それ以外については概ね計画通り目標を達成することができた。主な成果は以下の通りである。①「柿内青葉」展の開催(女子美術大学美術館 2021.5/19-6/26)、②オンラインシンポジウム「美人画熟考」の開催(女子美術大学美術館、2021.6/5)、③オンラインシンポジウム「美人画をときほどく」の開催(海の見える杜美術館、2021.9/23)。尚、①については展覧会図録を、②と③については報告書を刊行し、活動報告を東海大学HPに掲載した。

オンラインシンポジウム「美人画・熟考」

→ <https://www.u-tokai.ac.jp/news-section/44315/>

オンラインシンポジウム「美人画をときほどく」
→ <https://www.u-tokai.ac.jp/news-campus/48537/>

本研究の成果の一端は展覧会という形で一般に公開されるとともに、外部の美術館との連携により美人画をテーマとしたシンポジウムを2回連続して開催することで、当該テーマを学術的に深める機会もなった。美術館学芸員や外部研究者との交流も深まり、その関係で、プロジェクトメンバーは『鏑木清方美人画集成』（小学館、2022年3月）をはじめ、美術雑誌等への寄稿協力、2022年3月に東京国立近代美術館にて開催予定の「鏑木清方」展への協力など、個々の研究成果の一端も様々な形で公開することに繋がり、今後も美術館等との連携の拡がりも期待できる。他方、資料の基礎調査については博物館実習生が関与し、実物資料の取り扱い等を体験的に学ぶ絶好の機会にもなるなど、教育的な効果も見込めるため、次年度以降も継続的な調査研究が求められる。

「近現代芸能文化史に関する研究」 (個別プロジェクト③)

馬場弘臣・兼平賢治・木村政樹・神谷大介

2017年度～2020年度個別研究プロジェクト「戦後大衆文化に関する基礎的研究—緒形拳氏の資料整理をめぐって—」を引き継ぎながら、研究をより深化・発展させるために、本年度より2か年計画で本研究プロジェクトを立ち上げた。前回のプロジェクトは、時期的に戦後の大衆文化に限ったものであったこと、緒形拳氏の資料整理を中心としたこと、その成果を展覧会と研究集録という形で公開することが目的であった。そこで今回のプロジェクト研究では、時期的には戦前の大衆文化萌芽期まで立ち戻ること、その中心となる芸能文化史の全体を対象とすることをめざしている。ただし、演劇、映画、テレビ、インターネットなど、その対象となるメディアの歴史も多彩であり、それぞれの量も膨大になることから、本プロジェクトでは、「時代劇」それも「剣劇」に焦点を絞って研究を進め、それらの成果を2023年度に展覧会などの形で公開することを目標とすることにした。

とはいえ、本学で預かっている緒形拳氏および劇作家北條秀司氏の資料整理が完結していないので、本年度は、大学院生2名と学部生2名をアルバイト

として雇用し、資料の整理および目録のデータベース入力作業にあたってもらった。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響がなかなか収まらないために、とくに授業期間内はほとんど作業が行えなかった。したがって資料整理の予定量としては半分も消化していない状況である。他方で、展覧会に関する外部有識者との打ち合わせはある程度進んでいるものの、リモート会議が主であり、これも新型コロナウイルス感染症のために、人脈を広げるのが難しかった。

したがって次年度には、まず今年度分の遅れを取り戻すために資料整理体制を強化する必要がある。また、展覧会などでの研究成果の公表については、今後の新型コロナウイルス感染症の動向を見極めながら、具体的な企画を練り直し、公開可能な方法を模索していくことが重要であると思われる。

活動報告

「他部所等との合同研究会」

山花 京子

- * 6月26日(土) 10時～16時 文明研究所・マイクロー・ナノ研究開発センター共催で「文化財を科学するII」を行った。参加人数は合計50名。
- * 10月14日・28日・1月20日・3月3日 本学と平塚市盲学校との「ともいきアートサポート事業」でWSを開催した。篠原聡所員が主宰を務め、吉田晃章研究員、大阪府立堺支援学校 亀井岳氏、国立民族学博物館 広瀬浩二郎教授、岡山県立大学 真世土マウ准教授、東京大学総合研究博物館 鶴見英成助教らが参加した。東海大学HPに「平塚盲学校でワークショップ「笛吹ボトルの音色～呼吸 いのちのかたち」を実施しています」の記事が掲載されている。

→ <https://www.u-tokai.ac.jp/news-campus/49650/>

学部教育等との連携 「緒形拳・北條秀司資料と史料管理学演習」

馬場 弘臣

2018年に設立した「緒形拳研究会」の内、学生会会員の中から2名が大学院文学研究科に進学し(男子1名、女子1名)、新たに会員となった歴史学科日本史専攻3年生2名(女子)の4名をアルバイト



「緒形拳研究会」での資料整理作業

トとして雇用し、資料の整理にあたった。具体的には大学院生2名が緒形拳氏の台本やパンフレットなどの資料目録をPCでデータベース化する作業を担当し、学部生は緒形氏の写真の確認や、北條秀司氏所蔵のパンフレットをクリアファイルに入れ、バインダーに綴じる作業を中心に資料の整理にあたった。ただし、新型コロナウイルス感染症の影響で、とくに授業期間は作業日数を確保することが難しかった。

そうした中でも文学部歴史学科日本史専攻開講のウィンターセッション科目「史料管理学演習」は、対面で実施することができたので（2022年2月22日～26日）、タイアップ授業の一環として緒形拳氏の資料整理作業を実施した。具体的には、大学院生が作成したデータベースをもとに、映画であれば公開年月、舞台であれば初日の年月、テレビであれば放送年月を基準とした番号をもとに資料番号を生成しこれをラベルシートに打ち出し、個々のラベルをクリアファイルに貼り付ける作業を行った。これによって資料を年代順に並べることも可能となった。また、新たに資料が出てきても資料番号が重複することがなく、資料自体も所定の年代に差し込むことが可能となった。

次年度も新型コロナウイルスの影響がどれだけ残



史料管理学演習の様子

るかわからないが、「緒形拳研究会」大学院生・学部生会員を中心に資料整理を継続し、史料管理学演習の授業でも北條秀司—緒形拳資料を通じて、近現代の個人所蔵資料—芸能関係資料群についての資料整理を学ぶ場を設けていればと考えている。

『文明』第28・29号（2022年3月発行）

■内容のご紹介 第28号

巻頭言

- ・環境問題から考えること
(平野葉一, 田中彰吾)

特集

- ・「文明間対話」サテライト・シンポジウム：「環境と文明」シンポジウム実行委員会：
平野葉一, 中嶋卓雄, 田中彰吾, 安達未菜
カーボンニュートラルを目指す時代と里山イニシアチブ
(岡本光之)
現代社会のresilienceを考える—bricolageの視点から
(岡本光之)
ランドスケープを考える—自然を生きる人間の想像力
(田中彰吾)

研究ノート

- ・博物館を考える(2)—博物館の社会性
(平野葉一, 吉田欣吾, 井上岳人, 宍倉和弥)

活動記録

- ・ユニバーサル・ミュージアムの実践
—大学・自治体・博物館の連携が紡ぐ多文化共創社会
(篠原聡, 川崎一史, 亀井岳, 広瀬浩二郎, 堀江武史, 真世土マウ, 横山諒人, 吉田晃章)

■内容のご紹介 第29号（欧文誌 Special Issue of Resilience）

- ・Preface
(Kazushige YAMAMOTO)
- ・Introductory Address for the Special Issue of Resilience
(Takuo NAKASHIMA)

I. Bricolage and Resilience

- Research Paper
- ・Time Perspective and Resilience During COVID-19
(Soji LEE and Takuo NAKASHIMA)
- ・Structure of Bricolage Actions Using Tacit Knowledge during COVID-19
(Soji LEE)
- ・A study of environment-related QOL from the perspectives of "placeness" and "bricolage"
(Yoichi HIRANO, Takuo NAKASHIMA, Toru HATTORI, Mina ADACHI)
- ・Agency as Resilience in Traditional Festival
— The Case of the Niwaka Festival in Noto
(Toru HATTORI)

Research Note

- ・Destruction of Daily Values: Recovery and Resilience
(Sei WATANABE)
- ・Present conditions of leisure facilities and their efforts during the coronavirus disease 2019 pandemic
(Masamitsu FUTAESAKU)

II. History and Civilization

- Research Paper
- ・Correlation between Emotions and Society
(Mina ADACHI)
- ・A Consideration of Mathematics in the Renaissance: In the Terms of Modern Science and Bricolage
(Tomoko NAKAMURA and Yoichi HIRANO)

所員の活動

山本 和重

文明研究所長、文学部歴史学科日本史専攻・教授

【執筆・翻訳】

- 「資料紹介 神奈川県津久井郡青野原村役場の「動員日誌」（昭和12年～20年）— 日中戦争期からアジア太平洋戦争期における動員の推移—」『東海大学紀要 文学部』第112輯、2022年3月
- Preface for the Special Issue on Resilience. *Civilizations*, Institute of Civilization Research, No.29, 2021年

【その他の活動】

- プロジェクト「人文学の方法論に関する総合的研究」・「20世紀人文学の方法論的再検討」班オンライン講演会、2022年1月27日、樋口聡氏（広島大学名誉教授）「身体知教育から感性教育へ」の企画・運営

平野 葉一

文学部文明学科・特任教授

【執筆】

- Yoichi HIRANO, Takuo NAKASHIMA, Toru HATTORI, Mina ADACHI
A study of environment-related QOL from the perspectives of “placeness” and “bricolage,” *Civilizations*, Institute of Civilization Research, No.29, 2021年, pp. 15-24.
- Tomoko NAKAMURA and Yoichi HIRANO
A Consideration of Mathematics in the Renaissance: In the Terms of Modern Science and Bricolage, *Civilizations*, Institute of Civilization Research, No.29, 2021年, pp. 49-58.
- 平野葉一、吉田欣吾、井上岳人、宍倉和弥、「博物館を考える(2)」、『文明』, No.28, 2021年, pp. 47-59 (研究ノート) [本研究はJSPS科研費20H01227の助成による]

【報告】

- Toru Hattori and Yoichi Hirano: Importance of local identity for concept expansion of environment-related quality of life (e-QOL), 15th International Conference on Innovative Computing, Information and Control (ICICIC2021), Online, September 15–16, 2021年
- Yoichi Hirano, Kingo Yoshida, Taketo Inoue, Kazuya Shishikura: Data analysis of museum websites from the point of view of enhancing e-QOL, 15th International Conference on Innovative Computing, Information and Control (ICICIC2021), Online, September 15–16, 2021年
- 平野葉一・中嶋卓雄・鷹取勇希・安達未菜「「環境QOL」概念の導入と展開—現代文明における環境とアイデンティティの関わりから」比較文明学会第39回大会、2021年11月13日・14日
- 平野葉一：「科学教育の場から見たレオナルド・ダ・ヴィンチの知と技」、科学技術社会論学会（STS）、オーガナイズド・セッション「歴史的な機器を活用した演示・科学教育の試み」2021年12月5日、[本研究はJSPS科研費20H01227の助成による]

田中 彰吾

スチューデントアチーブメントセンター・教授

【執筆】

- The sapient paradox and the great journey: Insights from cognitive psychology, neurobiology, and phenomenology, *Psychologia*, Advance Online Publication, 1-23, 2021年8月（共著：Atsushi Iriki, Hiroaki Suzuki, Shogo Tanaka, Rafael Bretas Vieira, Yumiko Yamazaki）
- “Body schema and body image in motor learning: Refining Merleau-Ponty’s notion of body schema” in Y. Ataria, S. Tanaka & S. Gallagher (Eds.). *Body Schema and Body Image: New Directions* (pp. 69-84). Oxford, UK: Oxford University Press, 2021年7月
- Beyond the “body-in-the-brain”: A phenomenological view of phantom limbs. *Philosophy & Cultural Embodiment*, 1(1), 39-51, 2021年4月
- 『知の生態学の冒険』・J・ギブソンの継承3：自己と他者——身体性のパースペクティブから』東京大学出版会、2022年3月
- 「現象学的心理学の立場から—ソーシャル・コンストラクショニズムとの対話と直接経験を超越する心理学」能智正弘・大橋靖史編『ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学——理論・研究・実践のために』(pp. 46-63), 新曜社, 2021年12月
- 「現代の現象学と精神医学」『臨床精神医学』50(7), 727-732, 2021年8月
- 科学の知見をスポーツ技能向上へ繋げる——感覚運動学習のバイオメカニズム『バイオメカニズム学会誌』45(2), 71-74, 2021年6月（共著：山田洋・田中彰吾・木村聡貴・金子文成）

【報告・講演】(主なもの)

- 「現代の現象学と精神医学」第87回 Philosophy of Psychiatry & Psychology 研究会にて講演(オンライン開催), 2021年12月
- 「直接経験を超える質的心理学に向けて」第2回人間科学研究会にて講演(オンライン開催), 2021年12月
- 「ランドスケープを考える——自然を生きる人間の想像力」東海大学文明研究所主催「文明間対話」サテライト・シンポジウム「環境と文明」にて報告(オンライン開催), 2021年12月

【その他の活動】(主なもの)

- 人間科学研究会(第2回) & 心の科学の基礎論研究会(第89回)・合同研究会の企画および司会(オンライン開催), 2021年12月
- 国立政治大学(台湾)との共同ワークショップ「Philosophy of Care: 2021 Taiwan-Japan Joint Workshop for Young Scholars」に日本側コメンテーターとして登壇(オンライン開催), 2021年11月
- 共同編集した英書『Body Schema and Body Image: New Directions』をオックスフォード大学出版局から出版(Yochai Ataria, Shaun Gallagher と共編), 2021年7月

馬場 弘臣

教育開発研究センター・教授

【執筆】

- 『増補改訂 幕末風聞集』野の花出版社, 242頁, 2021年7月7日
- 『江戸学と現代社会』野の花出版社, 105頁, 2021年11月8日
- 「戦後の『世代論』と大学生気質」東海大学教育開発研究センター『研究資料集』第6号, 2022年3月31日

【講演・講座】

- 講演「異国船聞集」を読む—「幕末風聞集」第巻番一, 横浜古文書を読む会, ぴおシティ6階, 2021年12月12日(日)

【その他】

- フジテレビ「KinKi Kidsのブンブブーン」に北條秀司氏・緒形拳氏の資料提供, 2021年3月5日(土)放送

山花 京子

文化社会学部アジア学科・准教授

【執筆・翻訳】

- Kyoko Yamahana, "The first papyrus restoration project in Japan: Educating students to become papyrus conservators," *Comité international pour l'Égyptologie (CIPEG) Journal*, No.4, pp. 67-74, 2022.01
- Keita Takenouchi, Kyoko Yamahana, "Fine pottery shaping techniques in Predynastic Egypt: A pilot study on non-destructive analysis using an X-Ray CT scanning system," *Journal of Archaeological Science: Reports*, Volume 37, June 2021, 102989
- 山花京子、秋山泰伸「東海大学所蔵アンデス・コレクションのガラス玉の復元製作」, 『GLASS』, 65号, 34-48頁, 2022年3月
- 山花京子「5001 レン・イケル立像部分・5005 礼拝形奉献碑・5008 トト神への奉献・5022 猫・5036 嘆く女神イシスまたはネフティス像・5040 花鳥文蓋付容器・5038 婦人肖像(ローマ属領時代)・6051 青銅刻線人物文鏡」大原美術館編集『大原美術館+作品151と建築』, 2022年3月
- 山花京子「安曇野文化財団の南イタリア陶器」安曇野市豊科近代美術館 春の特別展『器展』図録, 32-33, 2021年5月
- 山花京子「古代南イタリア陶器」安曇野市豊科近代美術館 春の特別展『器展』図録, 3-22, 2021年5月
- 山花京子「「古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！」—クラウドファンディング型社会発信研究補助計画を活用した学部資金の獲得の事例報告」『文化社会学部紀要』第7号, 121-132, DOI 10.18995/24344710.7.121

【報告・講演】

- 山花京子「古代エジプト人の祈りを、神像の科学的調査から読み解く！—クラウドファンディング型社会発信研究補助計画を活用した外部資金の獲得の事例報告—」「安全な暮らしを作る新しい公/私空間の構築」研究開発領域 フォローアップセミナー 第1回「学術系クラウドファンディング」国立研究開発法人科学技術振興機構, 社会技術研究開発センター, 2021年12月
- 山花京子「江戸切子とサーサーン朝のカット・ガラス—切子職人の視点から」第58回オンライン研究会「カット・ガラス研究3」日本ガラス工芸学会, 司会・コメンテーター, 2021年12月
- 山花京子「サーサーン朝のガラス容器は、どのようにして特別な宝物となっていたのか?」第57回オンライン研究会「カット・ガラス研究1」日本ガラス工芸学会, 司会・コメンテーター, 2021年10月
- 山花京子「古代エジプトのファイアンスを3種類の技法で復元する—実験報告と考察—」日本ガラス工芸学会 2021年度大会口頭発表, 2021年11月
- Kyoko Yamahana, Yoshinari Abe, and Madoka Murakushi "Glass beads from Andean Collection of Tokai University, Japan," 22nd Congress of the Association International pour l'Histoire du Verre & ICOM Glass Annual Meeting 2021, 13th - 17th September 2021, Lisbon, Portugal, Association International pour l'Histoire du Verre & ICOM Glass

- 山花京子「古代エジプト資料の記録、分析、利活用を考える」 東京大学附属図書館 アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 第3回 協働型アジア研究オンラインセミナー, 2021年9月
- 山花京子・秋山泰伸・佐藤正志「アンデス・コレクションのとんぼ玉復元実験」 文明研究所・マイクロ・ナノ研究開発センター主催 『文化財を科学するII』, 2021年8月
- 山花京子「ガラスより古いガラス質物質ファイアンスのX線CT解析」 文明研究所・マイクロ・ナノ研究開発センター主催 『文化財を科学するII』, 2021年8月
- 山花京子・秋山泰伸・樋口昌史・浅香隆「古代エジプト最古の施釉物質の復元」 文明研究所・マイクロ・ナノ研究開発センター主催 『文化財を科学するII』, 2021年8月
- 山花京子「富山ガラス大賞展 オンライン見学会」 第54回研究会, 日本ガラス工芸学会, 司会, 2021年8月
- 山花京子「古代エジプトファイアンス製作技法の解明 浸灰技法」 日本西アジア考古学会, 第26回総会・大会, 口頭発表, 2021年7月

【その他の活動】

- 望星学塾 2021年度 第1回特別講座「ファラオのリーダーシップ」, 2021年4月, <https://www.kouyu.tokai.ac.jp/dousoukai/news/news-univ/1878/>
- 望星学塾 望星ゼミナール「古代エジプトのパピルス文書修復体験と古代エジプトフリートーク」全2回, 2021年11月
- TBS ラジオ 「伊集院光のらじおとこどもとでんわそうだんしつと」, 2022年1月, <https://www.u-tokai.ac.jp/ud-cultural-and-social-studies/news/2357/>
- 文明研究所・MNTC 共催 「文化財を科学する II」, 2021年8月, <https://tokainewspress.com/view.php?d=2192>
- 「研究費をクラファンで集める。東海大のうまい施設設計」 『ニュースイッチ』, 2021年6月記事, <https://newsitch.jp/p/27595>
- 「クラウドファンディングで支援募り」 『東海大学新聞』, 2021年6月記事, <https://www.tokainewspress.com/view.php?d=2225>
- 「東海大学とアカデミスト、「クラウドファンディング型社会発信研究補助計画」実施に向けたパートナー契約を締結—2件のプロジェクトに対してサポーター募集を開始」 academist 記事, 2021年6月, <https://academist-cf.com/pages/press/40?lang=en>
- 「【東海大】クラファン運営企業とパートナー協定、国内初の研究費補助の仕組み構築」 株式会社官庁通信社, 2021年6月
- 「研究テーマを紹介します アジア学科山花京子」 文化社会学部アジア学科ニュース記事, 2021年9月, <https://www.u-tokai.ac.jp/ud-cultural-and-social-studies/news/1879/>

篠原 聰

教職資格センター・准教授

【執筆】

- 共著「資料松前記念館の博物館実習—博物館との連携による博物館実習プログラムの構築」(『東海大学資格教育研究』第1号、教職資格センター、2022年3月) pp.71-84
- 共著「ユニバーサル・ミュージアムの実践—大学・自治体・博物館の連携が紡ぐ多文化共創社会」(『文明』第28号、東海大学文明研究所、2022年3月)
- 「文芸的な、余りに文芸的な美人画」(『芸術新潮 鎬木清方 語りをはじめの美人画』芸術新潮社、2022年3月) pp.24-43
- 「清方と弟子たち」「作品解説」(『鎬木清方美人画集成』小学館、2022年3月)

【報告・講演】

- オンラインシンポジウム「美人画・熟考」(女子美術大学美術館、2021年6月5日)
- オンラインシンポジウム「美人画をときほどく」(海の見える杜美術館、2021年9月23日)
- シンポジウム「彫刻をさわる時間」(大分県立芸術文化短期大学、2021年10月6日)
- 第514回みんぱくゼミナール「ユニバーサル・ミュージアムとは何か——暗闇で『野生の勸』を取り戻せ」(国立民族学博物館、2021年10月16日)
- 「平塚盲学校におめる笛吹ボトルワークショップに関する報告①」(アンデスコレクション研究懇談会、2021年10月23日)
- オンラインシンポジウム「彫刻を触る時間～鑑賞の能動性が拓く屋外彫刻の未来」(おだわらいノベーションラボ、2021年12月5日)

【その他の活動】

- ともいきアートサポート事業(神奈川県との共同事業)による「創作×地域展示(平塚盲学校)」「創作×地域展示(伊勢原養護学校伊志田分教室)」「常設展示(神奈川県立青少年センター)」の実施
- 「彫刻を触る☆体験ツアー」(松前記念館、2021年7月31日、北区文化振興財団、2021年11月27日)
- 企画展「手の世界制作-2 水、呼吸、いのちのかたち」展(松前記念館、2022年3月)
- 「彫刻メンテナンス」講師(小田原市文化交流課、2021年12月4日)



東海大学文明研究所所報 2021

発行人 山本和重

発行日 2022年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel.0463-58-1211 ext.3064・4426 fax.0463-50-2050